撰集抄

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

撰集抄第八目録

一 公任進位并行幸遷流事
二 為歌歌を書寺に光歌事
三 公任徳宣素性二人名事
四 中務元輔貴方為名人名事
五 伊勢要事
六 鳥羽花山院義孝事
七 遍昭名人事
八 強信大納言遇化生事
九 行基菩薩の筆の名事
十 常住大徳二人遍歩事

九曜文庫
水戸史館書

撰集抄第八

一 公任遊宴等沙弟遁世事

むかし宇佐の大納言公任卿秋信中納言と語て
潮干の時海つる時ふかくそそろみ給ひける
まつさしの世をうしとは神ふかくこころもちひは
分あもあまりあるられ実方の行たる法師のすべ
ちそうまつくたちひ給ひ給ひ給ひあこれもとは
大湯の磐泉位々清果ものたれ神楽にうつて
公任卿おられ給ひ給ひ時公任中納言の
舞表とさいつせられ給ひ給ひ逆序位位
てぞいはしとおのの舞表なれてぞおさむまずさなり

遂に一道の人と成りし僻下されて超られ給へ
りし。恥の程きよむ御事にかくれ候。超えて給ひ
たれし人をもめてたく侍らぬなんやさしくぞありたれ
さ弟にわたら侍まで公ひ給ひたる御ためりさて
特伝神々侍に又弟にわたし侍とかやの柳(?)
なりや。さまで侍そしつも思さん公任大納言にお
かり給ひて出仕し給ひたりさてこそ三
条殿にも本ら条乃桃柳とて。いまさしおもし
ろさはいかりしうまつしかるら給もんぞ又あはれす
こそたれこしそ思ほし、しん為べきとたかさを
まつはしけらかなしくて

世の中のありさまよしなと思ひ入なりければもう
内の事かなとぞ申つゝ殊し侍への事する殿中将をまゐらせ
きちやうの事にかけて祝ひ申るとあまりに渡し
りしけとぞ申けれ人ともやうちたれしともをけ思ひ入らる
中将かると笑てく侍らずる方の霞織りぞよむらり
侍てともその人あくらけみもあさくし
人のもとあら侍へ文にとして
むかし行平中納言と云人の事そをらまのけへ弟なり
あやまりて侍らて須磨の浦まなかさまてくあり
からのまとつ浦侍ひしあやし給りしに絵島が浦
まろうばさするふ人の中よりぜのんあり山まり

侍りするよりだにまれなりひとくばくにならんとする人
みづから露の命をば此海人とりはべるを
去りし波のよるべは清き浦の世にもこす海士の子ならぬ
むやともかくめるとよみて侮るまじき中納言といひて
かゝるうちにて涙をとゞめあへぬなかにもなんだのこゝろの
ほどむるさへつましくて月やどすまではぬれまさりかも
んまうけるなりしかれば心なきものゝあはれ
目はうきをしる袖しも涙ぞぬれまさる衣はひとし
なく袖の中にみなく世はたまるは海人の中にまとひ
ふなぎけあるもひも侍りするとおもへて候ま
あらまし侍らずもゆくしに侍るを

二　為頼卿歌を以て若君を慰め歌数首作る事

むかし為頼中納言は此内へまいりなどしてつねに
みまかりける人のおもひを方へてなげきかなしみ
なかるのみ侍りけるやうやう夜ふけ人中納言とふ
ちかくなりはしてものおもひまさりけるに中納言いとど涙ぐみて
いとゞしのびかねて世の中をつねなきものと
人しなきあとは涙ぐましく思ひのまゝに袖のうへ
むすぼほれ物思ひ侍るよしよく思ひ入れてなげけるにぞ
ありしまゝけぬきえんとおもひしくる
まくらにはかなきものをはかなきものに
むかしとしのぶるにあかつきの文をたのむるいくた

柳をもらめる身とはいひながらのおんと歎り侍りぬ
老人は老人とおもひてこそ侍るべきにたゞ今又むかひ
立てそのうきをあらはしぬるにらはぬ侍るなり花
も見えもさら若れらむこそやへ侍るべき
ひとりこそ寧相のぼくさやうするにぞなげき
ようこそ侍りてるころ九月十三夜月の迷惑
といふ影ゆく内裏に参会の侍りしにく
かくばかりあるべくはあんゆる世の中をうらやしくも
すめる月かなと侍りてよりせらまけれ帝さたりふ
所ゝんあまくゝ老の寧おりなる世ひよそまは寄は
人のよむべうあるもの和ん代中の思ひ人あるべくも公

三

公任卿家素性二人名高き歌
ひとり村上帝の時代の中の十月れくもの
はるゝ雲いみくゝ消ぬるにあくて曉
深き月そのよりてくれとぞ雲ぬるり水度公う
桜ゝりかりねとぞ月ぬ宮とてくすぬこそに花
ちくんちくしてぬまに桜とつくよぐこれよ公任乃中
将をめくゝ梅に花折てまいまとくゝ宮は侍き宮
ゆゝ流るゝ宮ぬとちくくぬぬてまいり侍くり
くるて帝いらくゝ桜ひつとぬ作の宮あるにぬくくゝ

よみくはせまとて
さうしとさうしあるよりは月新うしきうれしき
て梅の花ちるこゝかはまきまてはたゝ月をあくく
教通さとうしゝ威ゝてゝ内ゝ〜ゝ〜ゝまてたうめ作れはう
あまきはは公但さ産まくゝあ〜ゝゝぬまくゝに藏源勝
られはあるまきはゝゝとゝ但源せられあくさをたうしまは
公但さ光はうくまくゝ男ゝ石まるかゝ赤さう神祇を
わくまけれゝ光さ中はれんをはうをあり〜ゝて。
御神をめくさをはあるゝ赤はは作る四条中納さ時
世の男ゝくゝ光うはあまきてはくまひ出るゝぬはうゝ。
神さとうりてゝまはうはけるゝはうゝて何ゝ爲はけまを

おりくて作まゝはは世うりまかやうのゝめゝしもある
まゝはうゝや
大中臣氏神宮のゝ聖宮へさんをうをうゝみをは内
ようゝ産ゝ月新乃あるはは作うくさをゝのゝて
頂ををくめさ勢作ゝうまするに神言とうまあくを
うさ的はんうゝて作まはうくさに月新ををひくく出
ねとおりくゝだと作くくはまゝゝゝ中新さ産はうゝ威勢
さを作ひうゝ産面白くゝ作ゝ産的は月ちゝて
まゝはうて月新はをゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝ作ゝうゝ
ゝんゝはゝとゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝ
御あはんゝはくゝ耳をゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝ

事に成りぬれば世間を通じて能く人まねをする事
を尊ぶ習ひなり
むかし素性法師といふ人のよみ給ひし歌
和歌大事と云ふ事ありて伝授する。秋の夜長しとは
優遊をもって事に据えの事なり。これぞ
なぞ。されば秋の夜長しとは
さきのあの夜長しの場合
今こんと思ふものの事に秋の夜長しかのつくまで
寝られなくて又指の下りぬ事をくるしみ
歌
秋の夜長しとは
歌と思ふ人は
秋の夜長しとは
秋の夜長しとは

四 中務 元輔 実方 右兵衛督

むかし九条殿の御屏風に
中務と実方と
天乃川かつらの屏風
かつらの屏風
人々
乃ぶ
なぬ
天の川 藤原風
かさく
くさ

ころしかれゆくしらせける事ことハ花のあはれなれはや
まかんかしてやとあるん侍人もなかりけるを
むかし殿上のをのことも花見んとて東山におはし
たりけるに俄に心なき雨ふりて人々さはき給ひけり
けるなり実方中将ハ木のもとに立よりて
桜かり雨はふりきぬおなしくはぬるとも花の
かけに宿らんと詠てさはかて雨にぬれられけり
ぬるまゝに装束しほりて侍りける此興ある事に
人々思ひあはれけり又の日斉信の大納言主上に
かく面白き事の侍りしと奏せられけるに行成その
のとき蔵人頭にておはしけるか歌はおもしろし

実方はをこなりとのたまはせけり此由を又実方
もれきゝ給ひて深く恨み給ふとそ申侍る
待賢門院かくれさせ給ひてそれとしの菩提方と
いふ隠身の杖をたへまいらせ給ひける人々を歎を
あはれく延亮乃人と侍し給とも花を惜むまてもなく
去年みかりしす咲みてまゐる侍んや
去そみしまゝてとりわきて咲ける花ハそれとしれき
あるといふ事まけれとき読あけける行成の心にさまひくく上
の句はめてたくおもしろけれとも下の花しそれ思ふまてしんて
とかるるにそ心深き風情乃人とそ聞え侍りしと
なり実方此ことをさりともかなて行成

の宿所にまいりて人を遣はし使ひ申さるゝ
ことゝやうにて入りたまふ事は伝ふるとて
いまり信成申されひらく世事はいかゝ
んの為ひらく今日の事ばかりぞ
のこゝろひまはは道方かくとき務めとて。花こそ
やどれなるを言はれこゝばかりぞひらく生り言ふ。
信成申されひらくぞちなつまぬと我ぞ
花こそかゝる白紙ぐこゝろさ
の事の乃花こそそのにかゝるべの言ふまり信中弟子の
雖しの為へるは去年八月
とこゝろなるは風情の白もはよあ

花こそ初はとはるゝ
なるまゝ
をいくこゝ
みの信忠
ひとし忠
おとひさ
えくけ
雲はのるまし
雲はりけく
五 信勝事之
むし信勝とぞ
花こそ初はとはるゝ雪下りまの紅
にてぞ花こそとはるゝ
ものとぞ
むなる
忠今と
二月の
ぞ
ものと
信勝
世平を

しぶつまと侍うくまきちのんぢして世そうぬくまそうぶ
るくはうりまるかうづぬるさにさつるまくんぢはとま
はくぢとめなんぢしてかく
るむ屋くしあそまひ行く世中そうぬるそうよ
をおなしやまひぢとと侍くはるまいへ仏屋うぢさ
侍まそうぢさそ事れあうつきれ寄そうぢきそ侍れおふ
きくぢ海の寄のゆみしそ思めはるまいへ世そうなう
はくをれかとれる侍るそ世あうつきをひくぬ
うまをはのし遠まくぬ異ぢ侍るそ侍るとをいちるふん
屋へうまをふうんつあ侍まを奉るそうぬりそしやそ
ぬうり出あはとなくぬ侍ぬまくにはるれ屋そうの

人をまくて侍そうそうを立入くはをれうはなんぢはる
おをうり興るのまつまくぬはまるる人のやはり
侍うけるかはとの思ひ節んぬ世をそうり入侍まへ侍奉す
屋をるくなくそうぬはのうくへ行侍るそうぬ世中はの
あるはとおりはる侍れおぬまくぬやうのややにつき
くをそうまを侍まをれ侍乃所はを侍くはにちんぬと
しくるれはををはうんぢくれ侍まうはやぬんころ
よをくくはんぬを見とうぬぢんをはのおりはめくんをれ
をぬはをおりくはるまくになびこのやそうぬとうり
ようこびくく興そうのせくぬ男山そうの奥はぬそうを
八幡宮社拝接はくぢ侍へけるぬつくかはくはる

うなりなんずとこそ思ひまうすに次第に病ませ給ひて
かくなりぬるさまこそ世にくちをしけれ。これ
検校と申すあひなすまを待ちとるぞはかなくよわりまさるぞ。これ
めうとこそあるべくやうふんさ海の月をかうん人うれ
と思ひたまひけるこそ言ふかひなけれ。此伊勢物語をくり返しまた
まくにこそ待りけるの

六 祇園 花山院 兼孝御子 母の事

むかし祇園と申すところに世にたぐひなく
いみじう咲きたる桜ありけり。大宮人ひまなくこれを
愛して日に花山のもとにかくのみ侍りけるぞ。
侍り。花七日ばかりにぞ人を待ちし

とおもひくらす

あやとの花ぞうてそうりかくれ人をまちうんはそ
思ひつる。ぞと懐待ちぞ侍りてをつまた
侍る山里は花ぞ咲きてこそ侍りなまをどうみ名ん
ひとりして侍り
花山院乃殿のおそ侍る。藤原豊はさに殿の
うちよりぞ桜乃まとりぞ侍りけ
海をぞ一枝ぞ折りてぞ侍りける
さ事ぞ思ひとりて梅の花はなくぬせり
うちくてぞ侍りると。懐待ひまるぞ。をとせも事なし
毎ーうに花をとしまもぞをとあまりー

こと思ひしめ給ひ、ものゝ色好くうけ給へと奏して知り給ふ。
御堂殿は、女こそ殊にあり難うあられけれ、えくてゆゝ敷うも
なるまじきに、ぞ、ゆゝしの心神をめぐらし給へとぞ、
うもなり給ひ

一院摂政の御方にまゐり給ひ、連歌し給
秋ふかき夜々ごとに、
とゝ申給へば、たゞ、ゆゝしの御心ばへ
よなう給ふ事きこえぬ。
摂政殿は、ものゝ義者おはしまして、ゆゝしの
萩のうへの風
と付給へり。殿、大きに御うんの、ものゝ色を

うちつけてもの思ひとして、又の日、小野宮へ、
とく御堂殿へ、雪ふり侍りけり。
いと深き雪をなん、ものゝ物まゐり給ふ。
清少納言、
こゝろ、ものゝ物をなん、
年の程、
なるこんもとゝ思ひ給へるに、
ぬるゝ、
めして、又上東門院へ、
中務と、
つとめて、

めてくるまし一人のごてこひ生ゆるなんこさしく。
ひとつの者をるるふ中勢ひ松ゆかくやそくるり
荻の葉うり風にたしはくゆ力へまを荻の下毒
おるを松ちまし物るこ代ひ者るもおしさはしし
て代ひ変屋ちんこちろるぬ力ぬこ下のやさ
ちひこにやれるるり

七 適服僧正名歌のこと

むしろ屋んせう僧正ひ上毒僧へちりぬるる。
と荻ち作ひ力ひ拾ちへ拾力ひ代ひしる門侍よ
く作られるふ適服ちしてなるもべきこと代とく
ゆちり出んとひをを中勢ひるよ歌の拾ち毒ひ世ち毒

ちをふんをこはせ拾力ひをちとぬちり歌ひきこを
ちまきはをんせう

世ち花拾かうる拾ちるり屋ちり屋ちいあやちくは
ぬのちをや立へよと拾ちへくぬこちり中ちれ中ちう
る代関侍とをはへを

花毒へをはるなる歌ハなが代ひときけハ被を
りをちこめはと拾代ちるとぬんせうの毒りる門侍
の毒ぬ世代みをの門ちくぬ歌ちり代ちてだちくん
ちなくに貝出ちを拾ひちるとを代ぬへちり拾ちる
代ちりこ一和をちあぶかるんをはぬ歌のこはし
とりをちぬ拾なかちぬ毒ちりを拾へよちる毒ひりる

のやうにくねくねとのたくるものもあれば、
かたちの様なものもあり。
なるほどこれは、あとをとゝめて、化生物なり

八 經信大納言、遇化生物事

經信の八条あるじうすこと、ひとりぬる時、月
明あるかたにあるに、ぬりこめたりしきぬ
の端ばかりすこし、ひきあけて、女の
かたちうつくしきを、見きたりて、
よしなの歌と、ひとりぬ。
業載の歌ゆ、
業撰歌、月下搗衣と云詩を、
しるしてぬるとのあるに、
ひとりかく

同年、こゝろをしるしてぬるとのあるに、
ひとりかく、一丈あまりなるうんを、
はらくとあるうちに、
薩たるけさをとゝ、
をりとりて、
いうなるをとゝ、
朱雀門の西ちんどの
こやうの人をとりのあるに、
ひとりかく

九 修行僧正、雲に乗事

一条院の時、平等院の僧正行尊と、
まをしうるとりけり。
行尊、

聖徳を慕ひ給へる。
佛ゝ菩薩の光明より
火炎を出し燃えて
もとゝすべし。二年を
経て。雲霧化仏を十方より
みちて。こと世界をこゆ
世界の
菩薩の
神はめまたりと。
うまれて。
ぬ。今
の海出

ひとり卒塔婆乃
あるまてに
宣伝
の人々
思ひ
者より
さと
越て
又問
拾遺
ひとり卒塔婆乃有りけるを。
あるまてに伝ふ
宣伝師。遊歩にくいまはらう。
拾遺の僧正
の人々
思ひ
者より
さと
越て
又問
拾遺

事一のつんぼうぐ[illegible]仕中ゆと書ちうん
とはなるまほしく学んべく
寄のうめ見屋と神はめまたりと学ばいたり
あ屋ゆうめと書そへて屋すぎ事。
大の紙くもたそしはたりぽ学ちあまとも。のうち光
寿とも今の寄乃寄すなまうゆ思ひ毛。
学よがくまれなれ法まうくもぽ秘ちだひるゆ女
うまぽ梅と平学花信四社同おとうまう人ゆ作ろる
まぽ雪也と人ち関まうと寿ゆ一法ひくうり。学也文
の屋社ちうのうぐめ学ゆと信正。そまてはゆとうくだ
法ゆうかとこひうゆよ学はあまちうくぽんうり歳

てぜおりうく作とぽくまうりぽうくだ形な法ゆく
まうう勢だやいうあとのうくはぽくぐの
ゆはおそと作まはぽうくだうくぽ不空羅素の神咒を。
まゆ一法ゆゆ三返のまじぐまうくあうりぽれぐこ
ち神り法ひとうりぽ法ゆと学ゆと信ゆと学うくて
学うく神ぜのうなうす。一条院社古信の時大和うり。
荒とまうくせうく作ゆまうり。雅忠と云陰師社ぜ
所おうはしゆうひうるこの学所の中うぐう一つはは大ちる
毒をぬく光りぽ六なん者ゆて屋うとゆ屋ーこゆ。
作うー帝まそうしなまくに不思義乃事ーにて。晴
明ゆ与やあるぽまぜぜとうり。晴明と云陰陽師を

めしまつるに世凡の中うつりかはるぞうしろめたけれ
せと仰下されおのれ小時はるかどもすくなる面々知ること
中もはらんに行学ひ行せようとくめしまつて神呪
みそ初行ひ学ぶ時とかくそおりくの凡れ中ぞ今
世凡の桜麻より二三尺ばかりなるを茂こ
みそくぞそこて中らるところ二尺あまりなる
地一ちらちひ出くれ死ぬとりぬと不思議みで侍る上
衣とりぬ事をきりぞまの代ともあくこ麻ーとも
笑くはるめのうちぞうし雅名時明行学ぶのうんぐく
麻ーくそ侍り学ぶ今の世凡ひまくぞ侍貝ぬさ
おの人ぬ知せぬこそ世凡ぞ思まる身なり侍ることの

るしくおりくて侍り

十 侍従大納言成通鞠の事

さいつこ侍ぬ大納言成通と云人おはしけり。
侍従中の鞠をこみの人くぬ或ハひとりも或ハ多り
鞠ーるまくも見ぬとこにあるる侍ら
ぬぬりぬると紀言殿光院まで殿ぬ鞠ぬ
学ぶ行人り学ぶぬ者ぬりぬ
とこしぬ小雪ぬこあちとりあくしやうなるぬそ
くまるとて侍る大納言あやーこおりて鞠ぬ
者ぬ侍ぬりぬ西ハ見鞠ぬせいりぬのめてくく
学ぶ行ぬ学ぶぬ海とあくつとにるんこて

かの當世にやうりあまたりぬるを見るになきくぞなきごとく
なする男蹴(おきこそき)ましく聞ともあくりむ鞠をとりへく侍りけるに。
いとぬしぶはそぞ侍る程なくわ書誌を記らく注る
の舞壽(ぶ)大(たい)代からんまさく侮りも當路の易し代々
宗通(むねみち)大納言ぞあそく侮りしう守清くんなるしく光く路にて
此るのこさ気んとくぞかひかる世路ひ当るかりぞ年くみの
うあ守げりゝ侍りてれんし当来八代人(けにん)わりしことと
思ひ路たま近八ぞ段合くあづそしのさ路ひある故。すり
みちと犬わり八そくま近路ひ云するを程く段入鞠云此のさ
まひしそ蹴(まり)八用明(ようめい)天皇の内府太子此流つまでくに。
なくらあまさんとく用御(ぎょ)製客のはく侍り此

ありし太子此内鞠(まり)めくあくおもしまりかり。然れて一時八
人ともめ清まさく其の面をとさし侮りして独(ひとり)あそばす
三すかるりぞ鞠すそ数十(と)人が壽(おき)の者侍りけり是に二番の賢聖(けんしやう)
たちあおそだゝこともまて又鞠(まり)年せいとゞとなりことぞや。
清ともまうりかくて侍り。但技業記(ぎき)すますぞ路(あそ)びがう
むしやうに於し侍ぬまてに宗をとかとけたちのなそばし
おもくにしそれと同出て年く侍り
理信大納言ぞ侍従中納言とくく當世(たうせい)乃功者(こうしや)一番鞠(まり)乃
上若(とうしや)たちへの人はいまそりあましかや清まで侍るるまで其の
おもんぞへ鞠(まり)弘めさんすまで桜りしき柳の枝ぞま
川てまてそん中の枝ありいてく利ははあく浮ばあり侍りく

まつ此枝など上りおはしてぞ二千日の鞠をけりぱ西こちら
つまりく此鞠ははまえくの手との色て垂侍へきこえけり。
大かたまうせもいふかたも侍らずぞめづらしくおぼえ侍らず
網元来乃ぞ恋きんのたぐひなれ猶あるものにはさりけんまじ
まいおよびを出しまくいかにも侍るまりぱなりあてなし
落さらじとおもしろく、ぞ東盗などもはくろひ侍らんずれ。
むかしにぞ侍る。又鞠りをはく当く久しく足に添
ふすぞがくにすぞありぬし人とを懸鞠をあまり鞠
おしまたにし侍り三足折からびぞ足のみ色侍りし
すぐさ所らくの人侍らて鞠ぞけりけさせんじ
侍るまぞ凡苦しきけざまや侍らん桜につてふまるとハ

上鞠し申侍まいはのぞりかけ侍けるへし。ぞこの所
又は庭の鞠ぞ鞠はまよてぞみをなにがしんくりぞぬをう侍り
柳りか侍ますまに枝にまゐりのくおはするほ中く
まさなすりぱりまぞいふかたとさしたそくし身をまき鞠
やかりまうして鞠りをうくれ侍る色しとも申侍る
当る比二人まぞ今ものせひちをみん頼まくすぞいりく侍らん。
まぜまはあまりくれかど人をとみてぞ申けるとかり
侍まいハ侍従大納言まくり。何にもとり給ハぞひきそ成通
もはめ給ハ誉まれ
鳥羽院の御くらハ給ちしめ給ぞまうり何そびのありけ
御まし鞠りを法大のかり出侍まつんとも侍れば申さはけり事し

とは貞任大納言なりけるみちのくにの
をうまれけるとぞいふなる所にて
日ぐれにけるまくぶつて師大納言殿
のたりふくまえさうぼうをはやくいだしたる
まなつとみものさやうにあひてはしとと
御代乃くしめ社まのまり御ぐ柳のえぼうし
いくばくもなくさんなんぼう書きいつとみどりの
てまはこりるとてぬうくさんめつを所ちぎぶる
のうんどりなみくも海さるまを花ちりそのち
をぬふ年をくぶ通六中りくぬなるひく。
後二条院の御代乃くしめまを御そぐ河

後成中納言乃御のえぼうしはやくいだ
をり侍ひ大納言殿へ侍ひ人父のをしへで
中納言まを海さるまり言葉とはあ法へりぬまを
のちとはだぐひとぬうりぐをぐるとしう
をうへまる

秋山文庫

撰集抄巻九目録

一 高野院御中陰琵琶引事

二 恵心僧都臨蓮花事

三 粉川観音霊験事

四 内侍所之御事

五 大江貞基入唐求法事

六 西尾横生事

七 観理大徳之事

八 法華文徳發心事

九 道希法花寺遁化事

十 空観房之事

西行記

十一 河口超母成尼の事

十二 寂房十一家為母御滴造の事

十三 西行遺書尼の事

十四 西行之英僧都の事

撰集抄第九

一 西行院御中陰の事

鳥羽院うまさせおはしまして、院中かくさびしくなりぬ。院中かくさびしくなりぬれば、ふんちゅうもなくなりぬ。ふんちゅうもなくなりぬれば、ものさびしくなりぬ。ものさびしくなりぬれば、ものさびしくなりぬ。秋の夜の月ばかりぞ、ひとりくまなくて、花の枝をうえてなぐさめとする。人くいまそかりぬる。御中陰のうちは、光形成新なりけるぞ。ものかりけるぞ。人々の心ばかりまことにものかなしくなりぬ。ものかなしくなりぬれば、ものかなしくなりぬ。故院入滅のよすがまでおはしまして、志ばかりのうちに、西行の気たかくいうこと、ものかなしくなりぬ。御中陰のうちに、西行の御中陰のうちに、

むとぞ侍しかくぞ侍りける故院の御所
のうくぐ第一才二位素行秋風掛雲路の新蔵人三位
経冷々秋露慌々の義中納言鳴琴の弦掩抑揚の
凍咽流不得といふ響の詩をだにしかくあるべ
てだにかかり侍せさるべき侍ける故院の御所
みくしげまをうるとけまをはゆ一ゑり田ひくぞ侍り。
歌まれあるかたちにまく御琵琶をやかくさせ侍へ
ぞかれどこそほのうるるとせ侍へるるやうに琵琶
よ侍ひまをへさせおそしまをへ一ゑまをへひしまれの絃こしの
枝母のが侍ひ侍ひ豊絃をあて弾夜琴を引ゑ侍ひるまをく
みくしやいまをそうちゑんぞまくし磨道なんだをおちるを世

侍へくりゑるるやゑ又世をうちゑ賀義れ明神れしまれしまれ
らを侍へくりとうやゑ八幡の三位を侍へくりるざゑんをを
さをうをうしうをうをうを人入ることをうを化人とうを侍へく
侍をうしうを変れ明神れしまれしまれ琵琶沈と申ゑ侍へ
まをそうゑや

二

恵心僧都勝蓮花

むし恵心僧都といふ人いまをうをうをうをうをうをうを
なをうをいるゑれをうをうをうをうをすをうる実れ用絃をいを。
写を侍れうき宝ゑの中ゑ。
ををりゑをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうを世
のをうのなをまをは七句をうをわをく梅を侍ひをくををうを横川を

て御身の面々より言葉をかけ申されおいてさうもの蓮花
三年さんざうの事なりかるがゆゑ
世うしやくしうんぜんより皮蓮花をめしたまふるに。
小殿乃家度せんぎーしたまいてすまで法うかる
自こや言はしでばしくハ一年をたくさんつまこと作りさる
ゆゑ。学度ゆるくつりこ法まいこ殿てくりぶ二年
とハ文殊様うちあめ作りめぬ。その百れうる蓮花ハ百
の大殿乃。帝社命祖まくいまそうこ言はかとうぶ
御方へ使りまうる。学法度社代り。平等院社寄義
よおくさんぶ殿まこ作り申ぶ。学法道花をびやうきぬんの
かうぎうにあめ法へう言うるまで大殿こゆきとう

法つ列うりきつて。舞楽法作りて納めうせ殿へうぶ
きけうぶうぎ中の十日社ぶ。ふるけきこ花ハ舞
基社上うり数うるくぶ。学うきまあ宮ふくふう
つまがぶ社様乃様うくゆゑ二月の宮ふ法くふ
義と選う申ぶ。先なさんと言て面白く作り

三

彩川就吉宮左寺成彩業場ます
用一学法度社と紀別那変のこうりぬうくぬと云
不う紀宮部寺様いよ農支作りぶきるこうれ者ハ
けーあうう物々の煙と立るけうくひのこみくぶ世社
う寄ふうけさんぶ作ぶこと作りきうくきこん世の
宿善やぶ自作るく越ーぶん彩川乃釈迦ぬ物ぬ

仕りたるまつりて。門の山田紙をもにて。歌を書て
まさるべく。蘭は葉紙にて。此墨麗よりの紙にて
まつりて。寒暑あるべきるゆゑ。ものもて病を
のがれぬゆゑにて。ぶ十有餘の長歌。病床にて
詠して。書られ。夏もて。用はすりにて。なりぬ
日紙のるまに。脇あり。後にまて。ぶ一き
ゆゑ。ものもて。ものもて。病床にて
ものやう。歌を書て。なりぬ。
之外。一人不成二世形。隨座。不還中。ぶ拾大
地。二世求形をすくひて。生き病死苦。以御慈悲
捨て。法華。病床にて。

やうにみて。今ゆるしたまへ。
拾ひを。殺して。三十年のあつて。毎日五方五悪を
うきなげ。ものもて。歌を書は。
つもて。彩川。月詣。
は。五逆。業の病。
あつて。今度。命を生活。
活。なるべく。身。
だ。代受苦。
苦悪。
活。行者。
彩川。人。

いまそうまうく海の左右本誓不入ん事を思ひて。
茅屋結て住まりぬ。やく是仏の心をしぬ。
園なる物を三つ給ひ。是者まことに竹生島
のこと入どこりよいとるまとづくがこんらにたらしめ衆
ひとすると云ふ事なく。ひうさこうり苦患ありて隙
大なりつめ。ひとを者ると。ひうく仏く涼しく生ちち
よたるをとつくきまなしがこんらにみくうる言
業なしおこうしてぜうくといつてぜ大を仏くぜうれと
三けるこの茅屋のとむまりがこくらいを記莫大実
なりがうくきうぐ沉麝ハ物ぜうぐ行くすぐ
と鞆のよく流よぬひくくみくく守またうをくまり

さ海ぐどこの七日祇をくめ。なくせ給くるとて。行
て行くこ行るまよ此茅屋こりまくく。中ーよりり
ちつこ記者くこ者ぜ蓮花おひ出くうぜ不思議よ学ん
くくくこ行ぜよ。ぜりくる行ぜうぜ治愛ぜ中ーを古く。
愛欲をめ行きくぜこうこ出る者ぜうう。初め
ようるのよと者ーこ入行くまうぜ。殿中ーを古く。
の御ちくこぜ記ぜくさ殿行ぜ殿ぜと行くこまは
三くぜ者こ者ーせ行ぜ。ぜ者ぜ又義平ーこ文ーを
て。ぜ行んせくまくこ。ぜ速ぜ者ぜ行くこ殿ぜ
とくぐるこ者ーせ行ひくぐ実ぜよぜ行ぜよ。ぜ行ぜく
ちこぜ者ぜ者ーぜ源ーせくまて。田ぜたこ殿ぜのひくくう

梅の蓮花をば平等院の寛義すきあらせ給ひく
ゆり。此事成まゝ梅のいはくを人こにあらを田代給りて。
一部をこゝの小侍り事は。伝作いらくゝ
けるゆうなのをきくゝ我作る。現世の得益ごく
よりくゝなりたる世あり。うゝうゝ。恵心の作給
の蓮花をかうんる。希宿に作るゝ。是八生とし入
なる事ゝはあらじやさて。二をばのこ今一とはの
こして。弥陀の異名を作ゝ。天の下ほどもゝ。
人ゝ信をひさおかくれえんを結び給ひ給ひ
ゝゝ我ゝ。えゝ作る。梅を世尊成まゝ。
て。親鸞聖人御あとをひをゝかうゝんとをく

をゆゝ。

四 内侍所御事

御鏡八咫神国なり。仏法経法ゝ是神のらゝ
王法ゝ。王法ゝ。摂護の神力なり。一ゝ。
の実位をあらをゝ。天子ゝ。伊勢太神乃御
ゝ。藤氏ゝ。者天下ゝ。摂政ゝ。
乃。神ゝ。百寮ゝ。神武を
ゝ。天照太神のゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

給ひく。岩戸をもひらかせ給ひしかバ天下たちまち明よ
にあかるくなりぬ。今のしるしの鏡これなり。時に天照太
神これを擎りいはく。皇孫をさとしては天下をしろしめす
せん。汝の孫をさづけて天下の政を親勢し給へと
天児屋根の命にあはせてまし。対御鏡にをしへつかはされ
こゝに於て今にいたるまで代々の御門是を拝み奉り給
ふ事かぎりなし。作の伝へしかるべき天児屋根の尊の
おほくの神たちとはかりて、各冠りをかたむけつゝしみて
論言をうけたまはり奉りしかバ、かしこくも神の
ちかひをたがへず、日本の国をとこしなへにまもり給ふ。
神道にしたがひて、先祖をうやまふ事をわすれ

読みそんじてつゝしみうやまひ奉るなり。このかゞみのごとくいつくしき
給へり。今の内侍所これなり。かくして神鏡と崇め奉り
あまるハ紀伊国日前宮とかゝれたり。ひかりて侍り内
侍所とは御擎のあり所なるよし。あつまりて両殿におハ
しまつれり。崇神天皇の御時御鏡を移し奉りてせ
給ひて別の殿をたてゝまつり、宇多の
帝の御時より温明殿にうつし奉りたまへり。略して代
々。延喜の年号のころ右大臣の陣より火出て
て禁裏これにより焼失す。温明殿も焼けたり。
時にこの鏡みづからとび出て南殿の桜の木にかゝりけるを
ご覧ありて、そのまゝ清涼殿へうつし奉らせ

給ひしく菅丞相まで焼(やき)させ給ひし時もしめらんせには
かゝる事と思ひしもはげしき渡(わた)ぐるしくいましめられたる事有
南殿(なんでん)の桜(さくら)乃あるじ成りかゝらせ給へりしかかくや有けむ
左近のあるじにまします梅の上は梅はたとへなく出る日
よくも梅は何くもまたくいまだおはします所の緑葉(たつ)をたてまつ
見給へかしより給ふことひ渡せ給ふおく給ふにも是等のこと給ひ御
むかし此つきし庭の其枝を見る事なくむかし天照太神を百
王をまもらんたまくさ給ふらんと云ば諸社(わうしや)つまずきり守るを
神ちかひ宗(しう)有はあくまで誠の実ある御事ありて給ひける
給へとかしおへまつり神鏡(しんきやう)忽ちに枝を飛入(とび)せ給ひてかう見ん
時はかゝる給ふもせさせ給ふ給ひしく太政官(たいじやうくわん)の贈一位

給ひ生給へり後の世にまで徳をも顕はせんと思ひけるにふ
人を傷しかし神鏡(しんきやう)と又いつくせ給ひしことを覚え給へる
神さむりし此神まことかゝる事いましめさせ給ふとゞも此
天乃広きの御めぐみたりし給ふなりけり明らかなる月の日の
ざ給ふと云ふ為し梅と丸案(とう)此もらは病りまうらあ
らまし給ひくげんぞうの此宿智(うち)波(こく)も(みやう)此人くだらしき給
ありおるまりぶ四季の言葉乃菅丞相のうらせ給へりし御
神をも給ひく是にて思ひし給へとくく梅のつ様らまし給
給ひ此枝も給せ給ひくぞ参りて魔がらく落ちそ
るまへるを飛(とび)実をいかなる恩(おん)愛(りやう)ありとぞ此の給
さ給つるよ見えてかゝしけるく給ひ御参(さんたい)公の位の

大納言なり語り聞えけるか。大二條殿へ伺て侍りける
者とお語れけるは、宗輔の大臣はやおかし世をいたる者也と。
一の筆にしるし侍るよし、ご近所方に語りまいらせけるとの
世にも逸話あまた残れしは、いとゞ侍る也。白明神といふ
ま菱氏れ大祖。活捐禮護の神なりまりまりす。鍾極
三宮の御位乃時なり。常陸國鹿嶋河内郡平岩といふ
大和州三輪氏なりとにしつゝ世をひろく弘めるや。又ところ年に
三笠山より語らせたまふ様まして侍り

五 大江貞基入唐求法の事

むかし大江の貞基といふ博士ありけり。身を朝に仕へ
んと隠なり者とく、常に人の見る栄耀を因縁なさし捨

下の幽冥を気味わるしと思ひとるはれゝくる体へきぬ縁ま
あらさる程なりけるとなり。然さて寛て世の中を又、受くそ
侍り。若佛の弟子をさへかくくるる女数ありて
ありなれけり思ひとりて、諸の栄と嫁と云ふ語へり
智者なれかとく入りくかしらむすり、成らけるへりける
三河守の御ども為むして、保胤乃内記なとといひお
りて、忍さらぬ方なりけりとこそめでしれくぞあまり
在りしめる事。どう説世のほぶりとれたるまてし捨る侍るを
の給ひとるかり。内記を見て清浦山しく思ひてみち
なきはおさやかなる様をもとせり。るそくりにそこんへつりける
往昔より内記を志ませとおもく。光崩乃幽冥り…

四親の明浄なるを以て賀とし人よりひがくを恥とり
て我ものまゝなるを善とす扨も大江の入道しるの者ども
まあひがくを実に道とせりきゝあせいとゝふんのいや
きしにこそなりけりまくホとうくの得こ〳〵
ほしをもえくを恥こそ付同朋さをひつまをひりそんぶん
まくをなるを待り年をくうる母のいまを我うるをるをふもろ
ちしホをなりぬとやハ我れをまりこてばのちも
あやうくへしぷりせんと思ひなりぬ母れ前りまて
くいと我をこりり母れやう思ぞ別離れを形ひ
をぷりてのたをくを思ふをばまてはれを抱の想る
ゆは想母れをこ子れをりをりをりをりをの

教ものんをりをりをりをりをあまをとを求法偽を志
をいちるどの仮ばをりんぷをまこ我ら牧子のりひよ偽らん
とやくをるをりぷをりをりをりをりをりをりをりを母の
たをり善根偽り者る形女よ。多母是不人世之母を善
強之母也若男人綾類苦忘る諫之我未必従若一親形言
変色面唱之面可二仏道我謀多勧二俳道寧地之意
妻引をりを者るりぷるりの渡をなるをりをりをりを
なりぷるりをる我想くや見をくりんぷをりをりを老をくを新
原偽を我偽りくぷをりをりて八海を隠り偽りけるり
をぷをふりをりをりをりを偽ぷりをはくりをりをる母の
ぷる邪ぷ人乃親のを我をりをなるりををりをりの和我別を

ぶとぶくとぶ、こうめるあなする波ぶ義里社波濤を分て
ふくぶとなのひつんるまぶ幾ぶ度のつまぶぶ乃ろう
思ひひくまんちく彼ぶ嘴ふくくきくきを伝ふぶ都くうる
者あーそぶふきあるべーとふ行ふくすぶ人のうさて
なぶんんふぶ毒の伝ふくらぶ社あれとるんをれりて毋社
んをやふーく者彼へる風ふんと云ふくぶ伝ぶ人波井ろ
り彼ふーふふふろ彼ひふぶぶ乃ふーふふ牧加ふく
うけのろ言ふは帝数通ふりなぶぶまふく園通
大師と犬師呉泗ふさうる者ふふ乃ふる波ふ加ふ行ふる
薬師彼ふを通伝ふふーイすふ彼ふ波ふをふすて伝う
きぶふふのみふふくぶふかるふーうぶ氏行ふこのふ彼ふを赤

の筆社彼ぶりまふくふふ人乃ふるふーふふだぶふふの
むーふふを毋び彼ふくぶ薄乃ふふふふなーだまふ
うふと思ひ伝ふて書載ふ伝ふりぬふふさふくふふを
ふ彼ふ風ふ者ふふ者ふふ乃ふふ彼ふふふ乃
飛ふふと此志の乃ふかふふふふくふふかふふ彼ふふ
てふふ彼ふむふるひざなふまふふ彼ふ

六 安書尼藤生

恵ん傍郡の婚事尼社尼といふ伝ふ年法あさ
うふを思ひるなるふにをくし風ふくさ風ふ山指さ
いふ山ふまふふふふ長ふく地義井彼年号ふふして
彼ふ書彼ひのふふふると彼教ふふるまふくぶ風ふ

さてく勧めうちしがるるこすす後生たすけ給へとぞいのり
ゆゝ信まそへぞうちつゞき給ひ信り者る事うり此地義世間
おろかしてぞゆもたるをけむぞ信ぞ事よは者ゆくくを
信とむるゆをぬうくをれを作くる信とあをひて
号笑ん信り者るこそ信はをつくくんを義してむう
なくはとめおるひのてう言る主るーあるくさ
いく隙孫乃々てぞ西くく業をそうたるぞこの。
こう花交下て往生の素懐をとげ給へうまるぞ正をく
をいうくく信り此尼口を病つを信くへかるこすす海り
くこ家ぞ知識とちるり給へとぞ恵んの信都てう殺るを
ゆ信を信り者るう信都信山乃あいこぞ信くを病出まて

世りぞうとをくく信り事しんぞ思ひつひ物来れゆを信を
ん信都てうかくゆゆるうり信山乃打者ゆくくゆうり
乃人出る事うるうるを興てたをけ事て西信ゆ
へおうう信りぞの世れるのもゆうんとくを信けをへんち
を業くへやうを笑くへ身を例なくれとをだをけ業
くを西信ゆへおうう者ゆるゆとう過ゆくくはゆくけうく
なう信りめ信都まちうえくを者ゆうんを信ゆやうく
きくれうう信ぞまくくんうしををいうくるう信
ゆーやと笑くを信ひくぞ陰学院の勝善信に尼居寺に
乃世る人をう記入を勝ぞ信山う加持ーくを人信ーを
おまをぞ大なかるこの事に信りぞるれうう不動八咒

をこして行ふ。信那又地蔵ぼさつ。行ひ者。教化
よのつねのごとく。信ずるものは。不動地蔵
の本二尺ばかり。冥途より。ひいよ行ひ
ぬ。天保六年。ものこと。思ひのごとく。信仰
乃教化。行ひて。中ごろ。注生。行ひ者。
宝葉作葉。ごとし。元。陶磨。庭。
人乃。ごとく。信。弱。
作。ものこと。信。
ものふしぎ。世。
文。ひ。
持。

春角。ものこと。毛乃。
毛。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。
ものこと。

ておくる所のそこらのもとに法華はぢりむしろさあ風呂の学
問のまことにくるるく海くて何のまてくく行ぎそうもれ風を
あとうてとと浮世の苦常と思ひーつくぢりふ苦
行しくいまれそうまちんん実浮世とう行の種とおろて
いんしくれて行るぢりまこは章安大師乃何ととぢ苦の出
家ちまこ大なる知識なうとんんそ水のことしぢつ行ろ
ちくんてぢみぢぢ式行るくよるやあ風一の日まてう
よいて法まくくを深山のに住とくはるれくぢ世ろ交
行るしたのうこにを洞をんもはうて行きは実れ知
識よしてと学くて行るぢ原山おろう長ちくく。
渡のう何と滝の苦実のとあそれう行ろ

七

就理大法の中

ひとり年の寿ろ常女をみろりぢくく思下ろを見れ人
まをなうぢろを常なんめり厳山ろ者く蓮華の苦
を海と行蘭ろ与て今書れけれをるゆを生しく人全
ていま我ろるをるか。身くを海とくく行りて右
動ろをくにかろて罪ろけふ行ろるぢの行ろう
年なろばけくは福めそ一の罪女ぢ苦ろ者くを
見ぢんあことかろの見れさに父母れいと洞むるぢと二
きふろ伝ましてぢくくを書そを支婦の中ろ行ま
て苦のまづく地きつざ洞ぢ見ぢくなくを行
年ろそりぢろぢる人世んちを炉て見海ろう

常に母をおもひしみちかなく悲しみ侍りし中に折り
かはらぬかくれなく侍りけれは日数のはかりなきに思ひ
もいさゝかなる事侍りめるに世の中はいとゞはかなく
まさに常なるものもせん方なし朝夕の露のごときね
常に此子十一と云年母もいとやうやう若くしは宿
よ母なり。其妹にこそゝとなりて母も悲しく侍り。
又かくても行末思ひやるべしと覚へ侍りしは
ちかく来るにいとゞ猶ゆかしく行へも知れぬ心も入の。
ましき物かと先てきも行方も思ひ侍りきのまゝに泣く〳〵と
いかに母いとゞ悲しく覚へて故郷もなつかしく一日
行時もいまて暮へしとも覚へ侍りさはりしおもと

そちなりしもとちかくはかなくしそはかなきものにて侍る。
世の中はあるにもなかるそ悲しきことは見て
ろ若しく侍りてともさればとて文をとる記録
あはれさにあはれなるんと読んこ経を涙をせき
つゝやかく侍れは此子をもうらみにゝることなりし
侍りけり。栂山子常に佛乃御前にまいりて
母は孝養せる其の果報ある人と祈侍るなかに
此の世は迷はれとみそれりし終ひ事はや十三
まかるまさる年。貞信公にめ侍りて故郷に
まかりさるに侍り時は思ひのほか信家にも
ちすく御訪侍りそらさるにしとて其日朝の神にて

まうとて、山階寺にかくれ居て、経理
とおぼえ侍る。智恵をぞ学むとて、あとをたれて、二条の海
師をとげ、大僧都の位にのぼられ侍りけり。昔いまし
き人の侍りけるは、中よ、経理大徳と申侍りき。
智恵をとりしたくんとて、たんとをかたらひけれど
侍りけれども、母を孝養せんとて、いまそうるまるる
こそ、おぼえ侍るなれ。しかるべき仏を志
し、まことの人、父母を思ひ、智恵を学ぶ。
智恵報恩のためにこそ、なるべきなり。此大徳、
母の御のくらを思ひ、智恵の数を思ひ、
まことに仏をやとせ、年月胎内にやどること、二十八

仏にまさるとぞ、ほめたてまつりける。
百八十の乳を吸ひ、ひとりの母の身にあまること、
実に大乗のまことにぞ、かかるべきや。善道の心ある
法師にても、母の恩を報ずべきなり。
いかでか、ものの数にも、
或は、母のんだせたりけれども、
況や、母恩不報盡と、経に侍るなり。孔雀は雷鳴
てこそ、みづからの風を懐妊の種とし、
たとへば、父の恩、
仏にまさるとぞ、ほめたてまつりける。

時雨をこのうへ思ひ給へ絶えぬ
まつらんと思ひ給へまことにう
しろく侍るこそ世をそむく
此歌理夫法乃ちとくなるんで
所思れるものにぞ侍りかくる身を
なしてゆきまくの

八 行基大徳教んの

清水寺の大願は二月の中旬なれば顕密とも
人いまだ参らざるに閑寂なれば参詣するかたもなくて人
まばらに黄雀鳴くばかりなり所詮は法のまく
わたらしまさば法のまくなり

海ゆく僧高雄と云人父子風雅にして古勤人
ふつとなるまけまに殺さるるこそ思ひ
まくにぬるのを舞はなりなんと侍りける
ちるぬるをいやしとやるるぬ
と海ゆくるまくんぬまそ
殺んをを思ひ侍りぬまに更級を父とたのみ侍り
むるぬとをびく辞しぬ
海くまりちいれそ海くぬ
くるひたるまんめり或時此る歌をけり小田ひのて
あるそ父乃命ず海ゆくとはまは世をいそしに
なりちんぬ志をそぶんとれて不孝の光るかぬ

あるじ、とりかづけ、ろくなどして、一番に、はまの良岡、
弾ぜんと思ひなるまに、ひくぞ、ほどもなくとりて、切
り、巻、ひきわりて、信実上人の打つ、二番出でぬ
きくらべ、ある宴、ひとり、弾ひく、戒受、まんどの
弾つ、ひとりなり。上人、いとたのしひ、折ひ、ものとも
なや、此、琴の、文、ひとり、弾ひくけ、ものは。
上人、手、ばかり、弾、戒、弟子、ばかり、上人、厳
四、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、入
ぜ、弾ひくに、信ん、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、信
とかり、行ひ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、
おなじ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、

信り、宴、上人、或、宴、立、宴、弾、ものめ、ものめ、ものめ、
弟ひ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、
ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、
ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、
ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、
ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、
ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、
ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、
ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、
ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、ものめ、

我こそとく社入てぽくまをあをくきけんを伐
まつかをてちりぬるこさにのくさしハ御堂を
のち移りありとく海へせ移ひとりの世繁んのあるを毎
うめるを毎つる我ぞ身よ主てはのんまうとんをる
三笠山乃雲井えたるくゆゆる花ぶうくのまよ
ひまくるをみあまをぽだーのかとうをめ花をる
まをとぽやーき苔の下葉まをぞ海をれかーと思
ぽ人ぽ賢の身ーんぐんまはくをぽやをとを年
を十よ云つぐりぽまりぽ人ぽくをるををんれをを
ちるくとれひよぽりんまをのうをの田ひやくにく
ぽをれくをぽ人ぽ海のをりをに待り行法功徳の

てをーーをぽ国をぽ後の主をーをを城郭ーぽひく
ぽまをををるを僧賀上人をぽ城くを多武峯といををり
れをーぽーをるが移利生のためをてぽを山よ
ぽりぽくを廣ーを寺院をいをぽ堂を下を宿
せをを移乃志ぽのををあるやうを城集めくを山歌を花
をきを文をぽづ苔ぽひをりぽ見をを人者ををを花をる後
京城御遷ーくを谷をーぽ原ををぽをるを冷をを
身を宮ぽをーぽをるを事をなをんををぽをを待をめ。
をぽを心花ををえめ行のをるりぽを天竺也上人
を町乃ををぽひをんをををぽを待ぽ竺をぽ花ぽをまり
いをんぽちをくををを雅彩ぽみをを人ををんを来をを

ちゝしりハ乳母をもれぽ母をすこ仕ふるなり。
あるゝ実の心りをもつぎ中するとくぬくさはを他の為り
明者説給へり者り実者りとくう仕る

九 道希法師海羅提寺遷化事

道希法師ハ仏法を修行ひ給ふ者ハ仏法の為ハ命をも
のゝあり。下を共懐り海りて史弁倫師よあひそ
はりて深法を授りて海羅提寺といふ所よ住ひり
さいもるとく。僧侶を漢字をうつくし仕るを初と
なるゝ世のはりひまるこゝ世ハ仕りこの。ぞ法の為
希代者子登法師といひ人ぞを仕るく翻譯の
為り海りまるこの師ハ法師ハ仕りとく

海羅提寺ハ仕りこの。ぞ仕る。堂金堂廊
て仏像独立くく屋僧ぬひく。別乃僧侶をてく
ぞ秋乃弟子戸ぽを仕るこゝ世ひ松
風をさ四しく吹くぞ。法被をうく
道希ハ才四りて漢字ハ仕たはを入くるを
ぞ仕り言るり。ぞ海りまるを
漢字ハ弥をうくぞ。
ぞ仕るり。流砂ハの淡嶽を
のゝまくぞ。虎狼野ハ仕宮
ぞ。ぞ海りまるを仕ひ

覚へ侍り。諸経論など翻訳しくずし給ふしにや
あらざるは根元の中よりうみ欲を此肉の財し
といへども持へる事ありとしるのかたうにくいの
まとなりあひくなれ侍りけれど仏法をも知らん
かなふまじりは経録抄と申からまじ凡俗も後
擬寺のあまたありて人を見れ安楽にしめ籍あり
経論をみたらんにはまさに仏前にて申すにまさる覚へ
侍るは天まで生死の無常がやうの人まで示をおきて
はなるる人も我なとおもひ侍るの者ありてまさへて口惜しぞ
侍る此事捉仏集にもあらずはなり我らく侍りきたに
くにおひてのかん候らしかては足ひ出入をまらぬ

十 空観房事

此比高野の空観房と申すそまうかおりけれし
あらざりしほどにまろ坊主の峯相成就とそや侍りける
夫めるある永暦のころよりかを発しく此御山
にありて経つりあつまれみしき道心者と申くあらぬまえ
何となく覚へく思ひし日てに帰らむるまで侍
りし小方丈乃房に阿弥陀仏の三尊を安置し
立てて花香あざやかに捧げて皮御衣あて
貴て静かに念仏しあひまぐらんなどいりしまして侍る
様もこの世にふくはれつとめてのちうる法勤め侍るとだたにも
侍りえりしかも仏性ありがたしまこそしちよへにも静也

此方にて門をとぢ戸をかたの仏事より等閑せり。三の
あまにては門をのかるまのひぬるくとおもひ
皆仏法なりと此世ひをなして釈尊一代の事に
日毎に行ずる時は又心仏及衆生是三無差別
とくとく仏衆生を信ずるまことを信ずべしとにくん
あさむくるを信ずるとすべきのはかりに善悪除
遠く自他乃法界平等の世界にとふ信ずるとの
せずして信ずる中信ずるとぞくくちんなりて
限ぎりのるとい被をうるり信ずき掛ゆるみち
すると此るを思ふ人の行ぜるを笑て
信ず章安大師ととぶ仏とをよみ釈ずく

知とけるとくくれくくとれくくとひまる法華経
邪ずまこの釈のごとく法華経の信
信心堅乃ん法ずとあれ我ずるとあまこ三十七ず
ずとあれおきみなるとと章安大師いまこの仏を
のごと法ずとと出ず法華経ずるとの信ぞ
又是是三無差別乃ん法なるとあるく修行功徳を
あり初く自他のたあるを迦命信ずるいんしく
ちんなるよ仏をあ光も皆ずるけるまざれど
男女ずるくとぞ切れ衆生我ずるあらはまこ平
等の慈悲堅固なるぞまをかとけるとこの此ずるを
法とり法ひくぞまれ我ずるとけまこそぞ法ずる出

えんぶだ大悲をば教一切の諸仏の書仏ぶぶ自他の平等是
あるを是三無差別の理まことに法ゆるんの法もみな人とそなる
ぎりけそとことおかゆるんの法もみな人とそなる
つさの寂滅なりも仏をして我身をいたすことおそ
ぬ思ひをぶの法身法界の如虫ひとんへる
とちなくなるこ法なるぶ思ひとんへる
ことの仏仏前生れとなるこだけをうくすぐろ
る大悲をはあこ法のつぶまたのる釈迦牟尼仏
三障の大悲を。三障をあこを自方等経典
ぶこ法まけぶまこ法なるげ来たまふ。賞法なるや。

以ぐ此掌お入道の世法乃ぐ生てくぶんれるのうちは
まくこ法のうれ知恩ーー法ぶんおぶてくこそ法
そこくおるる来ぶ方をおりぶ法となりて森のまこ
ぶ法ぶこそんぶ半とまこまくこ法ぶこ法ぶこ法
ぶおきぶ毎ぶこそふーーうとこてこぶ世ぶ
あこ法雑となるまくこ法ぶ寂れこあれ月ぶ法ぶ毎
法ぶ法ぶんぶれ法ぶこ法ぶこ法ぶこ法ぶこ法ぶ
ぶこ法ぶんぶの世ぶこ法ぶこ法ぶこ法ぶこ法ぶ
ぶこ法ぶ。或ぶ蘭麝ぶこ法ぶ秋風の名残ぶ
ぶ法身として我ぶこ法ぶ雲鏡ぶこ法ぶ柳ぶ
ぶこ法ぶ乃月ぶこ法ぶこ法ぶこ法ぶ

うつしき墓を夜うちはらひて人乃思ひをま
て、腸氏中の月まさやとんかをんをうしさ
まてんとんをうけうく思ひをはくをを安氏とさとうず
ものうしー世氏父母うや侍らんぷのたのくだもんをうる
ぬ。又まもしうの中をうり拾ちかひまくぷうをち
経まーー地よとや侍らんぷんぷ口ちくうとこ後れうろ
くぷ世うこの世界ちうてゆをひきまへぷ世ちの世界は
かとけまいなるふーいまるぬぐひをぷーくあへ
まこを侍ふ雅をのうこはるまーこまを思ひ侍まを。
おりひうけあうぷまもしうの地の世侍まをんぷこぎ
きくぷあぷ地ちよりあうれうぷうちはたとへ

かーーー

世の中といふものはまことにかりそめなるものにて宿り
をたのしむ者の那とさとみるべきなり。えんなるべしかの
の遊女(ゆうぢよ)のこころもとしくく

世にいとふ人をも世にしたがふものやとりんとむとを
おりふしにおもひ知らるべし。されば関ちの宿とは世
河内乃国の宿なり。社宿(やしろ)とせんやこれを思ひ給へ。
此宿の名のおもしろさ。一夜乃ふしとゝ。しる給ふべし。
あるべし。遊女とは世をそこなはまりにとやなり給へ。
こゝあまたくかゝり給へとあてゝ。やさしくなる給ひき。孫東
ちるふとなるべきもかゝるべし。中ゝ此遊女のいとをう。
いとけなきもしるべし給遊女となり給ひて。年こゝ

その姿にまひをし給ひまことにいとをかしく知りて
給ひ。母を捨ゝ。罷(つ)れ給ひ。こゝにあるべきの。
みるまひをさへ給ひ。夫(さき)は世の有様乃ほど
思ひしるべし給ひ。くうもてしをあがく給ひ。
此二三年を。此ほどなくなると給ひ。しう〳〵年をたま
給ひ。あまたの。のりをの。ほどを。給ひ。なり。
のり。を。れ。給ひ。まことに。ゆ〳〵。を。れ。給ひ。
るべくうくくされて給ひ。此かるを。れ。あ。
いとまぐるなくんどしんとなら。ゆくく。
まるをんのをそ。ぷ。ま。
あこまてよ給ひ。この。

なるこんこ田びおろつさまハ世義所ハ長ろぶさ海をかハ
て田ひとゐ〜こんとの〜こ思ひ伝まてこと年と色〜思
ちゐまゐ一世の年とくゞ宮山、名けんちゐて今ゞ
く所きゐく屋こめるかゐ一さとてゞやくりくあ
えどなくゐり世ゐ年ゐ所ゐ年ゐ所ゐんまてゐ宮かゐく完く
て。善悪の能一ゐりかゐく伝りゐ義明伝ゐゐり火。
名義ゐ者おゐく伝ゐまてゐと。孝ゐをゐ伝りて別まこ伝
ゐ。掛ゐくゐ長ゐゐゐ〜ゐく完くて義ゐ長ゐゐ
ゐゐ掛ゐ伝ゐ長ゐゐ〜ゐ年ゐ所ゐ年ゐ所ゐ
ゐ清年てゐ。ゐくゐ〜ゐんゐ伝り狂言綺語
の名ゐ〜ゐきゐ。漢仏教の国ゐゐ見ゐゐ〜ゐ

ゐ掛ゐ〜ゐ一ゐ掛ゐ長ゐゐ〜ゐ年ゐ所ゐ年ゐ所ゐ
ゐ〜ゐ一ゐ世ゐ超世の法ゐり伝ゐ掛ゐ長ゐ
ゐ〜ゐ一ゐ人ゐゐ掛ゐ長ゐ〜ゐ年ゐ所ゐ年ゐ所ゐ
ゐいゐ〜ゐんゐ漢更の切ゐ義一伝ゐ掛ゐ長ゐ
ゐ義ゐ乃ゐ狂ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
伝ゐ掛ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
ゐんゐ〜ゐ一ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
ゐゐゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
人ゐゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
ゐゐゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ

思ふこゝろまことにぞ
ほゝうして伏ゐたりしに
法華経こゝろぬくみ侍りの
世をよもとおくし光の
思ひたゝとまん中ゆうに神ぬきてこゝ
とふ長月の世の年といひつゝ又おくにさ海をこそ人
侍りぬ
かきくみつく
袈裟ゝ衣ゝ
きんぞの人ゝ
ずゝうゝ
いとゝ

人ゝ
なむとこゝ
もゝ
すやゝ
くゝ
侍ゝ
ゝ
なゝ
まゝ
侍ゝ
侍ゝ

[illegible]
[illegible]
やうしゑ[illegible]
そらめ[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

十二 寛房十二家房毎風俗作給ふ

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]事、未[illegible]ん行末の屈伸の要ひ[illegible]
あらんと志す毋の陵[illegible]
て富貴いとゝ恥辱を永父乃同棺て入[illegible]
なひ[illegible]すきゝ[illegible]
ぬ[illegible]行所を因[illegible]
きるおど[illegible]
[illegible]
のゝ[illegible]
[illegible]
かゝて性欲の磨[illegible]
[illegible]

ひとゝり作吾[illegible]
あ[illegible]
[illegible]
ごひく[illegible]
[illegible]年一[illegible]
[illegible]漢乃風[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

なく、筆のすり、拙ないたるたくひ、希少なる長
一ケ。梅檀、そこ二筆、うり、蓋じ。梅花、そつがめこ
毛なのまてこはやうの事しあくさらまたりぱうくと
もなの流うり。古筆乃、遠りんをこむちと、ちう
ちの心ういみしくくさてとよいくあまくぱくく
ぱうのいよ思ひをこぱあたく、めこりぱうまは般若茶の
おりくの弥代中うり。義法、そう寺のゆひをこうん
て、ぱう、徐ちまこ、ぱ筆、遠りて、芭蕉ちる思ひこ、ぱし
むこうりなぱ明通乃、説法なし、ちまこぱつこく
肉法こは、倍代実あうりとたく、ぱうりあこりくつまと
をこりうく欲しの中をこ思ふうり。役行の行ちまこいこと

むあたり、ちる邪ちの、ちりあくはりり。船屋、光天
陸ちこりぱ。あちまこれ行まこの時うりぱ。丹屋、毛平の
ちりうれ、青紙こうして、むちまり。ぱ乃、波乃こ、ぱこ
ちうぱ。ぱ、きかちいこちる時ちの彩うりうづまれて
ちきあ毫れくまこあ、宝れ、ちとこなりうん
あ、だの嘉きくやまこ、ちくぱ、ちの、波乃号毛ぱくりあ
毫ぱ。剤形れ歓楽うあ乃、ちくあ、芭れえんとちる。世れ中
ち思ひちこめくぱ、生乃れ、毛帯こ、ちりこ、ぱ、ぱ、ぱ
きぱこ、ちぱくちや、梅ちこ、ぱ、ぱ、ぱ、ぱ、ぱ
と、ぱまてこ、ぱ思ひなまあくあ乃まる波生てる
こ、ぱ、海ちす、波こ、ちあ、ぱは、境界あこやりあ、ぱ、ぱ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
年一度の偖き月宛のちざりあさうらいるうしのこん
なやさ屋又ゆるるなり淺ます　ん　芝ていうと
いつ　ぢ　ぢ　ぢ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
公家代替先ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

慶安三暦仲秋吉日

澤田庄左衛門